
第1章

謎

この本は財宝に関するものである。またはたぶん財宝に関係していないのかもしれない。我々には分かっていない。ただ一つ確かなことは19世紀後半、南フランスの僻地の村の貧しい神父が突然、大金を使い始めたということだ。これは確かであり、今日でも彼が生活していた村では彼の家、図書館、庭、教会の中の豪華な内装を見ることができる。そのお金の出所は常に謎に包まれている。多くの人々は彼が財宝を発見したと考えているが、誰もその財宝が何であったのか、どこにあったのかを知らないし、それが本当に存在したのかどうかも不明である。

教会の中ではあらゆる場所で多くの絵画や像の細部に思いがけない奇妙な点が見られる。おそらく神父は彼の秘密を、彼の死とともに埋葬することを望まず、彼の富の出所についての謎をそれらに隠したのだろう。しかしそれらは本当に謎なのだろうか？多くの人々はそう考え、それらを解読しようとした。ここ50年間、多くの人が図面、クワ、ツルハシ、ダイナマイトを持ってこの小さな村を訪れた。発掘の痕は司祭館の地面に残された穴に見ることができる。最終的に行政は訪問者への大きな警告『Les FOUILLES sont INTERDITES (発掘禁止)』の看板を立てた。(写真2) 財宝探しは禁止された。埋蔵金は発見されず、もし存在していたのであれば、今でもそこに残されているのかもしれない。

その村の名前はレンヌ・ル・シャトーである。南フランスのラングドック地方、オード県にある。深い谷と森に覆われた丘の頂上の背景には、雪を被ったピレネー山脈がそびえている。県庁所在地は古代の城塞都市カルカソンヌである。オードにはかつて多くの騒乱、悲劇の歴史があった。ローマ人はこの場所に足跡を残し、ローマ帝国滅亡後には西ゴート族がやってきた。12世紀になるとフランス王から迫害された禁欲的キリスト教一派のカタリ派が要塞を築き、現在も彼らの遺跡が切り立った山の上に残されている。テンプル騎士団もこの地方に城を築き、カタリ派の最期から100年も経たないうちに、ローマ教会の手によって同様の冷酷な運命をたどった。

教会について話を戻すと、この物語の中で最も主要な人物は神父である。以下は多くの本で語られる物語の要約である。

ベランジェ・ソニエール(写真6)は1852年4月11日にジョセフとマルゲリータ・ソニエールの間の8人の兄弟の一人としてモンタゼルに生まれた。ベランジェには3つ下のアルフレッドという弟がいて、二人は特に仲が良かった。アルフレッドもまた聖職者になるための教育を受けていて、おそらく秘密を知る数少ない一人であったのだろう。

幼い頃ベランジェはレンヌ・ル・シャトーから数マイル離れた小さな商業の町リムーにあるSt Louis学校に通い、続いてカルカソンヌにある神学校に進み、1879年に聖職授与された。初めはアレ・レ・バンのvicaire(助任司祭)に任命された。3年後の1882年、彼は

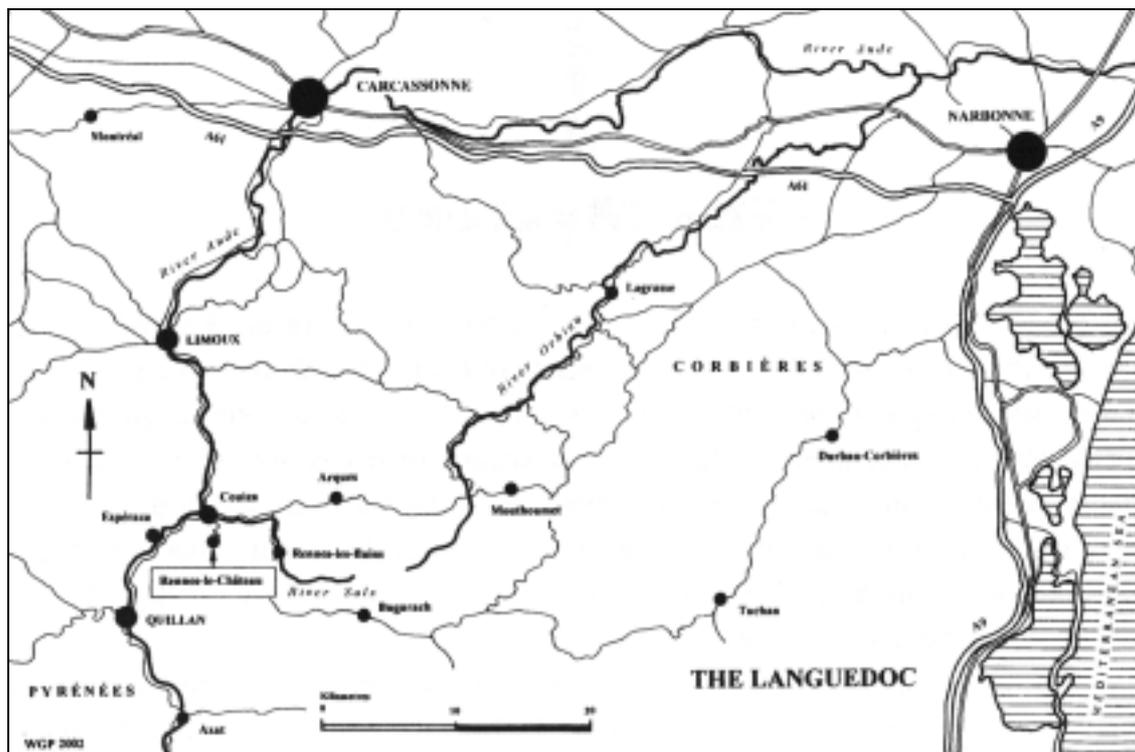


図 1.1 ラングドック地方の地図

さらに 10 マイル南にある Le Clat 村の *curé desservant*（教区牧師）に昇進した。これが彼の最後の転任であった。彼は生涯をオードの溪谷とサル川、それを取り囲む木の茂った丘に囲まれた彼の生まれた場所の周辺で過ごした。1885 年 6 月 1 日、ベランジェ・ソニエールは人口 298 名の小さな村レンヌ・ル・シャトーの *curé*（教区司祭）に任命された。この時期、彼が起こした初めてのトラブルの記録が残っている。ベランジェは王党派として、給料をもらっている司祭としては政府側からすれば好ましい思想の持ち主ではなかった。浅はかにも彼は政府を批判する演説を行った。彼は上司の司教から叱責され、一年間の停職を受けた。

彼が最終的にレンヌ・ル・シャトーに赴任したとき、ベランジェ・ソニエールは彼の新教区がとても貧しいことを知った。家屋は荒廃し、水道もなく、村への道路は馬がやっと通れるものであった。彼自身の給料はとても安かったので、彼は魚釣りや狩猟して食料を補わなければならなかった。

村の家屋同様、教会も荒廃していた。ベランジェはさっそく改修に取りかかったが、貧しい村では集められる資金に限りがあった。彼は荒れた祭壇から取りかかった。解体中、彼は祭壇の柱として再利用されていた西ゴート時代の古い柱の空洞の中に隠されたいくつかの羊皮紙文書を見つけたと言われている。別の説明によると階段室の足元で見つけた柱の空洞の中にあつたガラスの小瓶の中から羊皮紙を見つけたと言われている。

いずれの出来事が本当であるにせよ、羊皮紙の発見は驚くべき結果をもたらした。2つの羊皮紙の複製は残されている。そこには新約聖書の一節がラテン語で書かれている。詳しい調査の結果、それには隠されたメッセージがあり、余分な文字が加えられていたり、

文字が置換されていたりする。

第二番目の羊皮紙文書に隠されたメッセージは分かりやすい。宝物は7世紀メロヴィング朝の王ダゴベルト2世のものだと書かれている。しかし一番目の羊皮紙文書は解読がとて難解であった。宝物についてのメッセージをソニエールは理解したと思われるが、2番目の羊皮紙に書かれたメッセージを解読するには誰かの手助けが必要だったに違いない。

いくつかの話が伝えられている。ソニエールがこれらの羊皮紙をカルカソヌの司教に持っていき、その後、その内容について助言を得るためにパリへ向かった。彼はサン・シュルピス教会の神学校校長の甥であり、言語学の専門家でもあったエミール・オッフエに相談したと言われている。オッフエが羊皮紙文書に取り組んでいる間、ソニエールはパリ社交界に入り、当時最も有名であった人々、作曲家ドビッシューや有名なオペラ歌手エンマ・カルヴェと知り合いになった。

彼はルーブル美術館へも足を運び、ニコラ・プッサンの『Les Bergers d'Arcadie (アルカディアの牧童たち)』を含む3枚の複製画を購入したと言われている。この絵画は田園風景の中に石棺が描かれ、牧童たちがそこに刻まれた碑文『Et in Arcadia Ego (たとえ楽園においても、死は存在する)』を指差している。レンヌ・ル・シャトーから東へ数マイル行った町、アルク郊外の道路脇に似た石棺があった。絵画の背景はアルクの実際の風景と似ている。17世紀にプッサンは何か重大な秘密を知り、この絵を謎の手がかりとして残した可能性はあるのだろうか？このヒントは羊皮紙文書の中にある。難解な方の羊皮紙文書が解読されたとき、メッセージの一部に「プッサンが鍵を握る」と書かれていたのだ。

彼がレンヌ・ル・シャトーへ戻ってきてから、ソニエールは改修を再開した。これまでの作業員を解雇し、多くの仕事を一人で行うようになった。作業員は退去する前に、穴の中で光る金属を見たと言っている。およそこのときまでに彼は墓の入り口を見つけた。これは彼の日記に記されている。

1891年夏、ソニエールは教会の玄関脇にマリア像を新しく置いた。その像の台座には羊皮紙文書が見つかったとされる祭壇の柱を、天地逆にして再利用した。そこに「MISSION 1891」と碑文を刻んだ。

ソニエールは古い墓地を整理し始め、再配置したので、村人を怒らせた。村人は先祖の墓地が破壊されるのを見て、公式に不服申し立てを行った。古い墓地の中には、18世紀にレンヌ・ル・シャトーのオープール城に住んでいたオープール伯爵夫人マリー・ド・ネグル・ダブレのものもあった。彼は彼女の墓石から碑文を完全に消したと言われている。その碑文は現在では、一番目の羊皮紙文書を解読するのに必要であることが分かっている。しかし、その文面はソニエールが碑文を削り取る前にオード科学協会のメンバーがレンヌ・ル・シャトーを訪れた際に記録し、後に会報として出版された。

この墓石は元々2つの部分、直立する部分と下の平板部分からできていた。下の部分もまた、羊皮紙の解読には必須のものであり、ソニエールの赴任前にすでに失われていた。その後この部分の絵が地元の作家ウジェーヌ・スチューブラン(Eugène Stublein)の『Pierres gravées du Languedoc (ラングドッグの碑文石)』の中に存在していることが判明した。この本の一部分のコピーはパリ国立図書館に存在する。

ソニエールはとても奇妙な行動を始めるようになった。彼が重たいスーツケースを持って郊外を歩き回る姿がしばしば目撃されている。彼はドイツ人抗夫が丘に掘った鉱山を何

第1章：謎

度も訪れたと言われている。彼は時々何日もの間行方をくらませた。彼はしばしばクイザからスペインとの国境に近いペルピニャンまで列車で出かけた。彼は大量の手紙をやりとりした。クイザの女性郵便局長は一日に150通の手紙を彼が受け取っていたと報告している。

この時までにはソニエールはかなり豊富な資金を持っていた。彼は教会を全面的に改修し、19世紀フランスのカトリック教会にしては風変わりな様式で飾った。彼が配置した絵画や彫刻の細部は異常である。玄関の上には警告メッセージ『TERRIBILIS EST LOCUS ISTE (ここは恐ろしい場所)』がある。入り口を入ってすぐ、聖水盤を支える悪魔の像がある。十字架の道行の中には多くの奇妙な点が見られ、西壁に掛かる「キリストが苦しむ人々を救う大きな絵画」の中には、草の上に置かれた布袋からこぼれる金貨が描かれる。これらの中にソニエールは彼が発見した秘密を隠したと考える人もいる。

ソニエールは村を再建し、新しく水道管を敷設し、クイザから4km登る新しい道路を建設した。彼は教会の隣に質素な村とはかけ離れた豪華な屋敷を建てた。建物の庭は手が込み、台地に沿うように見晴台を作った。片側の端には鉄組の温室を、逆側の端には新しい図書館としてマグダラ塔を作った。塔の入り口のドアは鉄製であった。

ベランジェ・ソニエールと彼の忠実な家政婦マリー・デナルノー (写真7) は新しい屋敷には住まず、古い司祭館に住み続けた。ベタニア荘と呼ばれる新しい屋敷は年老いた聖職者の隠居場所用に建てられたのだが、歌手エンマ・カルベ、文化省大臣、ヨハン・フォン・ハブルブルグ大公ら、もっぱら特別なゲストをもてなす場所として使われた。彼が使ったお金は少なくとも19万フラン、現在の価値に直すと数百万ポンドに相当する。

1910年に新しい司教が赴任して、彼はソニエールの豪華な生活を見逃さなかった。ソニエールは教会裁判所でお金の出所について説明するように尋問を受けた。彼は、お金は合法的なものであるという説明をしたが、受け入れられなかった。彼は今後ミサを行うことを禁止され、また所有財産を教会に譲渡することを命じられた。

ソニエールはこれら全てを反動的に拒否し、司教およびローマ教会の権力と長い闘いを始めた。レンヌ・ル・シャトー教会から閉め出された彼は、教会からの懲罰をそれ以上避けるため、ベタニア荘に祭壇を置き、許しが出る日までミサをそこで行った。

ソニエールは1917年に死亡した。臨終の床で彼は近隣教区の司祭に告解を行った。この司祭は彼の寝室で衝撃を受けているように見えたと言われている。しかも彼は臨終の秘蹟の儀式を行うことができなかったと言われている。ソニエールが死んだ時には一文無しであった。彼の秘密の財産は家政婦であったマリー・デナルノーに譲渡されていたと推測されている。

彼女はベタニア荘にその後36年間住んだが、年を取り土地屋敷を管理するのがだんだん難しくなってきた。1946年にベタニア荘はレンヌ・ル・シャトーを訪れ、家を気に入ったノエル・コルブが取得した。マリーは一生彼女がそこに住むという条件をつけて、ベタニア荘を譲渡した。彼女は質素な生活を送ったが、彼女はノエル・コルブに宝が隠されていること、さらにいつの日にかその秘密を彼に教えることを示唆した。しかしマリー・デナルノーは秘密を明かすことはなかった。彼女は卒中に倒れ、以来会話ができなくなった。マリーは1953年に死去したが、ソニエールの秘密は彼女とともに消えた。

財宝についてはいろいろな推測がある。黄金または銀？どこから来たものなのか？西ゴ

第1章：謎

ート族の財宝？西ゴート族が紀元410年にローマ帝国から奪った財宝には、紀元71年ティトウスがエルサレムの寺院から奪ったメノラー（7本枝の燭台）も含まれている。これら財宝のほとんどはまだ発見されていない。

西ゴート族は5世紀に北部スペイン～南フランスに王国を建てた。もし財宝がそこにあったなら、後にメロヴィング王朝のクロヴィス王に渡ったと考えられる。二番目の羊皮紙文書には財宝がダゴベルト2世のものだと書いてある。このメロヴィング朝の王は、西ゴート族の北部の首都レーダ（現レンヌ・ル・シャトー）に住んでいた王女と結婚したと言われている。その後財宝はカタリ派に渡り、レンヌ・ル・シャトーの周辺で拠点を拡大したのかもしれない。

ソニエールは羊皮紙文書の情報からこの伝説の財宝を突き止めたのだろうか？カタリ派自体は1244年に滅亡させられたが、その後、財宝の秘密はフリーメイソンへ引き継がれたと考える人もいる。

この裏には、テンプル騎士団を影で支配してきた秘密結社シオン修道会が存在する。そしてそれは今日も存在していると考えられている。フランス国立図書館にある秘密ファイルにはドビュッシーやジャン・コクトーを含むグランド・マスター一覧が存在する。マリール・ド・ネグルの失われた墓石部分にはPSと文字が刻まれているが、Priory of Sion（シオン修道会）を表しているのではないだろうか？

また、ソニエールが発見したものが黄金などではなく、とても危険な情報であったと考える人もいる。ソニエールは秘密を守る代償として多額のお金を得ていたというものだ。この秘密は危険なものであったのかもしれない。この物語の関係者のうちノエル・コルブを含む何人かが殺されている。1953年にはベタニア荘の庭に埋まった3人の射殺体が見つかった。

キリストはマグダラのマリアと結婚し家族をもうけたという話がある。磔の後、彼女は初期のキリスト教を広めるため子供を連れてフランスにやってきたという話もある。メロヴィング王は彼女の子孫だと言われ、つまりはキリストの子孫である。別の話ではキリストは十字架の上では死なずに生き延び、南フランスへやってきたというものだ。彼の墓はどこかに隠され、非常に限られた人々だけが知る秘密である。これらの秘密がレンヌ・ル・シャトーで起こった出来事の裏に存在するのだろうか？

レンヌ・ル・シャトーにある秘密とは、現在でも村の周囲に存在しているものだと主張する作家もいる。レンヌ・ル・シャトーと近くの丘の頂点は正五角形を形作る。この不思議な自然地形は太古から知られていたに違いない。それがこの地域に特別で不思議な重要性を与えたのだろう。これはなぜ多くの遺跡が特別な位置にあり、お互いが等距離であったり特別な角度をなしているのかを説明している。これら遺跡の配置が、ラングドック地方の丘と谷に存在する謎の重要な手がかりを与えていると考える人もいる。

これらが奇妙な物語の要旨である。多くの作家が物語に興味を引かれ、分厚い本や記事、ラジオやテレビ番組が作られてきた。しかし本当に起こったことは何なのか？もし可能ならば、たとえ100年以上前に起こった出来事でも、我々は真実に迫りたいと物語のもつれた糸をほどく作業を開始した。